

令和元年度

大学スポーツ振興の推進事業

成果報告書

令和2年3月

新潟医療福祉大学

# 目次

1	事業の概要	.....	2
1.1	事業の趣旨及び目的	.....	2
1.2	事業の内容	.....	2
2	事業実施体制	.....	4
2.1	新潟医療福祉大学におけるスポーツ分野の統括体制	.....	4
3	大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施	.....	5
3.1	アスリートの傷害発生予防を目的とした調査研究と予防的介入活動	.....	5
3.2	アルビレックスグループと連携した課題解決型教育プログラムの構築	.....	10
3.3	新潟医療福祉大学版学生アスリートのキャリア形成支援プログラムの構築	.....	17
4	まとめ	.....	26
4.1	実施した事業	.....	26
4.2	総括	.....	27

# 1 事業の概要

## 1.1 事業の趣旨及び目的

本学は保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、対象者の QOL (Quality of Life) 向上を考え、QOL 向上のため支援を実践する人材 (QOL サポーター) の育成を教育の基本理念としている。また、本学は地域のスポーツ振興や人材育成に寄与するためのスポーツ資源として、教員、運動部、スポーツ施設、健康・スポーツ分野を実践的に学ぶ学生等を保有している。

本学は健康科学部健康スポーツ学科と強化指定クラブを中心に、地域と大学が連携・協働・共創する場を作り、共に学び、成長、発展し、共に QOL を向上させることを目的として、既に地域へのスポーツ指導や障害者スポーツの振興、アスリートのキャリア支援についての実績を残している。また、2018 年度では大学スポーツ振興の推進事業として、本学スポーツのブランド力向上に向けた施策立案、コンプライアンス遵守、安全対策、大学外との連携強化策立案、スポーツ教室の質の向上、スポーツ傷害予防フォーラムの実施、アルビレックスグループと連携した人材育成のさらなる推進、障害者スポーツのさらなる振興に取り組んだ。

引き続き大学スポーツにおいて他大学のモデルとなることにより日本の大学スポーツの発展に寄与することを目的として本事業を行った。

## 1.2 事業の内容

本事業では、大学スポーツにおける先進的モデルとして、以下の 3 項目について企画・立案及び実施を行った。

### (1) アスリートの傷害発生予防を目的とした調査研究と予防的介入活動

大学スポーツ発展においてスポーツ傷害への対応は大きな課題であり、本学では「アスリートサポート研究センター」を設置してアスリートの傷害発生予防を目的とした研究活動を行っている。アスリートサポート研究センターは、本学の健康科学部健康スポーツ学科、リハビリテーション学部理学療法学科、健康科学部健康栄養学科に所属する教員（医師、理学療法士、アスレティックトレーナー、健康運動指導士、管理栄養士）から構成され、各種研究活動に必要な専門領域の体制が整っている。さらに、学生で構成されるトレーナー部員も多く研究実施に際しての体制も十分に整っている。

本事業では上記の目的を達成するために 4 つの研究活動を行った。

#### i. 同一フォーマットによるスポーツ傷害発生調査

スポーツ傷害の発生状況を把握し予防介入システム構築のデータベースとする目的で強化指定 8 クラブ（硬式野球部、水泳部、男女サッカー部、男女バスケット部、女子バレー部）を対象に同一のフォーマットで調査を行った。国内の大学で複数のクラブに対して共通のフォーマットによる大規模な前向き傷害調査例は少なく研究方法そのものの独自性も高い。さらに、2019 年度は 3 年目の調査年に当たり、この結果をまとめて傷害発生の特徴や発生因子を解析評価し予防介入プログラムの構築に役立てる。

#### ii. 超音波による疲労骨折スクリーニング調査

疲労骨折はスポーツ選手に好発し初期には無症状もしくは軽微な症状のため診断治療が遅れることも多い。超音波は医療機関以外の現場で疲労骨折の有無を判断できるためスクリーニングとしての有用性が高い。本学ではサッカー選手やバスケット選手に多い第5中足骨骨折に対する超音波スクリーニング調査と足部形状の評価を行っており、2019年度は調査対象を学外（Japan サッカーカレッジ）へ広げて調査を行った。

#### iii. 大学女性アスリートの栄養サポート体制の構築

女性アスリートは「三主張：利用可能エネルギー不足、無月経、骨粗鬆症」に見られるように女性特有のスポーツ傷害の危険性があり、適切な栄養摂取や健康管理が極めて重要である。女性アスリートの栄養サポート体制を構築する目的で、本学強化クラブ女性アスリートを対象として身体組成、月経状況、骨密度、疲労骨折、栄養摂取、睡眠状況などの実態調査を行い、栄養サポート体制構築の基礎データとする。

#### iv. スポーツにおける脳振盪発生状況調査

スポーツにおける脳振盪発生が近年重要視されているが、本学強化指定クラブのうち脳振盪発生が報告されている硬式野球部、男女バスケットボール部、男子サッカー部の選手約200名を対象に、Sports Concussion Assessment Tool (SCAT) を用いた測定を実施し、さらに脳振盪発症予防の目的での介入前向き研究（シーズン前のSCAT2評価、試合前後の認知機能変化）を行う。

### (2) アルビレックスグループと連携した課題解決型教育プログラムの構築

既に本学はプロクラブであるアルビレックスグループと連携し、インターンシップの実施やスポーツマネジメントの調査研究、経営者による講義、トレーニングマッチの実施、女子サッカー部員のアルビレックスレディースへの登録等の人材育成を行っている。

また、2018年度の事業ではプロスポーツ選手や学生アスリートがSNSをどのように活用すべきかを学ぶ場として公開セミナー「アスリートとSNS」を開催した。

これまでの課題として、実際の課題解決まで結びつけた教育プログラムを構築出来ていない点がある。本事業では課題解決まで結びつけるスポーツ教育プログラムの調査及び本学におけるプログラムの検討を行った。

### (3) 新潟医療福祉大学版学生アスリートのキャリア形成支援プログラムの構築

学生アスリートにとって大学時代は競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図る重要な時期である。本事業では本学の教育の理念の実現と結びつけた学生アスリートのキャリア形成支援プログラム構築を行った。

## 2 事業実施体制

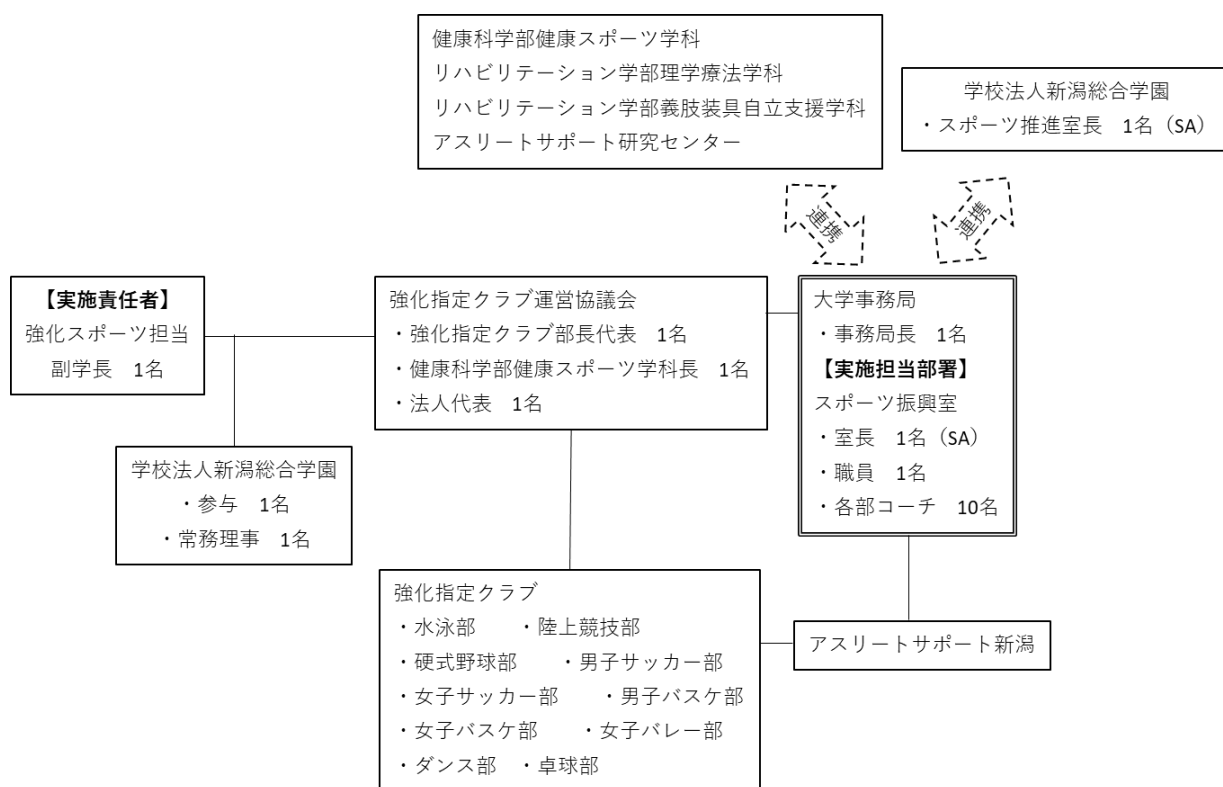
### 2.1 新潟医療福祉大学におけるスポーツ分野の統括体制

2019年度のスポーツ分野の統括体制は下図の通りである。強化スポーツ担当副学長を責任者とし、大学事務局のスポーツ振興室が中心となって事業を担当する。スポーツ振興室長をスポーツアドミニストレーターとして配置している。

強化指定クラブの運営は、スポーツ振興室と連携し、強化指定クラブ運営協議会を中心に行う。その他、学生・職員への試合結果の広報、スポーツ関連事業の新規企画・立案、学内外の関係者との調整役等をスポーツ振興室が担う。

学外関係者との調整に関しては室長をスポーツアドミニストレーターに配置した学校法人新潟総合学園スポーツ推進室と連携する。

その他、健康科学部健康スポーツ学科やリハビリテーション学部理学療法学科、義肢装具自立支援学科、アスリートサポート研究センター等、事業毎に関連する組織と連携しスポーツ振興室が主体となってPDCAサイクルを回しながら事業を推進する。



新潟医療福祉大学における 2019 年度スポーツ分野統括体制

### 3 大学スポーツにおける先進的モデルの企画・立案及び実施

#### 3.1 アスリートの傷害発生予防を目的とした調査研究と予防的介入活動

大学スポーツ発展においてスポーツ傷害への対応は大きな課題であり、本学では「アスリートサポート研究センター」を設置してアスリートの傷害発生予防を目的とした研究活動を行っている。アスリートサポート研究センターは、本学の健康科学部健康スポーツ学科、リハビリテーション学部理学療法学科、健康科学部健康栄養学科に所属する教員（医師、理学療法士、アスレティックトレーナー、健康運動指導士、管理栄養士）から構成され、各種研究活動に必要な専門領域の体制が整っている。さらに、学生で構成されるトレーナー部員も多く研究実施に際しての体制も十分に整っている。

本事業では上記の目的を推進するために4つの研究活動を行った。

##### (1) 同一フォーマットによるスポーツ傷害発生調査

###### i. 研究の概要

スポーツ傷害の発生状況を把握し予防介入システム構築のデータベースとする目的で強化指定8クラブ（硬式野球部、水泳部、男女サッカー部、男女バスケット部、女子バレー部）を対象に同一のフォーマットで調査を行った。国内の大学で複数のクラブに対して共通のフォーマットによる大規模な前向き傷害調査例は少なく研究方法そのものの独自性は高いと考えられる。さらに、2019年度は3年目の調査年に当たり、この結果をまとめて傷害発生の特徴や発生因子を解析評価することができ、今後の予防介入プログラムの構築に役立てることができた。

2016年10月より傷害調査を開始し、2017年度、2018年度は通年の調査を2年間継続することができた。調査結果については、その方法および単年の結果について学会にて報告している。

- ① 伊藤渉, 江玉睦明, 柵木聖也, 熊崎昌, 菊元孝則, 中村雅俊, 中村絵美, 大森豪. 大学におけるスポーツ外傷・障害調査システムの構築. 第28回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 東京, 2017年11月18-19日.
- ② 伊藤渉, 江玉睦明, 熊崎昌, 菊元孝則, 中村絵美, 平林怜, 稲葉洋美, 大森豪. 大学強化クラブに対する同一フォーマット用いたスポーツ傷害調査 (第2報). 第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会 (札幌市). 2018.11.2-3.

###### ii. 実施状況

これまでに継続して2019年度の傷害調査を実施している。2019年度についても、各クラブにおける傷害発生状況の特徴の把握に役立てることができた。頭頸部外傷や脳振盪については多くないものの発生しており、選手の生命にかかわる傷害としてその対策についてアスリートサポート研究センターで協議することができた。膝前十字靭帯損傷といった重症度の高い外傷について調査開始時に比べ発生数が減少しており、本調査自体が各クラブへの安全配慮の意

識付けの役割を果たしていることが考えられる。大学生女性アスリートの発生率が高かった足関節捻挫や重症度の高い膝前十字靭帯損傷について個別に検討を重ねることができ、学術集会や研修会にて成果を報告することができた。本年度の調査終了後に3年間の調査結果としてまとめ、大学生アスリートの傷害の特徴について分析し、予防介入プログラムについて検討中である。

- ① 松井瑠美、伊藤渉、川村拓実、渡辺稜甫、大森豪、江玉睦明. 女性サッカー選手における慢性足関節不安定症と coped の片脚着地動作中の COP の違い. 第 30 回日本臨床スポーツ医学会学術集会. 2019. 11. 16-17.
- ② 伊藤渉. 北信越サッカー医科学セミナー2020 in 新潟. 新潟でのサッカー傷害予防に向けた取り組み. 2020. 2. 14.

### iii. 今後の課題

傷害調査を開始して3年となるが、年毎に傷害発生の傾向に偏りがみられることが分かり、一大学の特徴として整理するためには調査の継続が必要であると考えられる。また、活動環境や指導方法の影響も考慮する必要がある、大学生アスリートのスポーツ傷害の特徴を把握するためには他大学と連携して調査を進める必要があると考える。

## (2) 超音波による骨折スクリーニング調査

### i. 研究の概要

疲労骨折はスポーツ選手に好発し初期には無症状もしくは軽微な症状のため診断治療が遅れることも多い。超音波は医療機関以外の現場で疲労骨折の有無を判断できるためスクリーニングとしての有用性が高い。第5中足骨疲労骨折の早期発見、予防に向けて新潟での検診制度の確立を目指し、2018年度より本学男子サッカー部を対象として検診活動をスタートしている。超音波スクリーニング調査と足部形状の評価を行った。サッカー選手において第5中足骨疲労骨折の認知はまだ少なく、早期発見や予防に向けたことも重要であるが検診活動によって第5中足骨疲労骨折について認知されることについても意義があると考えられる。

### ii. 実施状況

2019年度は本学男子サッカー部に加え、近隣の専門学校であり、選手育成を行っている Japan サッカーカレッジを対象として検診活動を実施した。大学での活動を新潟地域へ広めることができた。

本学男子サッカー部および Japan サッカーカレッジへの検診活動をおこない、2次検診の必要となる選手への対応を進めることができた。既往歴のある選手についての身体的特徴や活動状況について分析し、予防に向けた知見について整理した。前方視的に第5中足骨疲労骨折のリスクを検討することは症例数が少ないことから難しいが数例の症例より股関節内旋可動域の減少が関連することが考えられた。これらの成果について研究会や研修会にて報告することができた。

- ① 伊藤渉. 第 11 回 Jones 骨折研究会. 新潟での Jones 骨折予防プロジェクト. 2020. 1. 10.
- ② 伊藤渉. 北信越サッカー医科学セミナー2020 in 新潟. 新潟でのサッカー傷害予防に向けた取り組み. 2020. 2. 14.

### iii. 今後の課題

これまでの検診活動を通して本学の他のチームにおいても第 5 中足骨疲労骨折の認知には課題があることが明らかとなった。予防において第 5 中足骨疲労骨折を認知してもらうためにも検診の対象チームを増やしていく必要があると考える。大学での活動を新潟地域により広めるために新潟県サッカー協会と連携するなど検診を実施する人員についても広めていく必要がある。

## (3) 大学女性アスリートの栄養サポート体制の構築

### i. 研究の概要

女性アスリートは、男性アスリートとは異なる栄養課題を一部抱えている。また、大学の強化指定クラブに所属する女性アスリートに特化した栄養サポート体制を整えている大学はほとんどない。そこで、本学強化指定クラブに所属する女性アスリートを対象とした戦略的な栄養サポート体制を構築することを目的として、本年度は基礎調査を実施した。

### ii. 実施状況

本学強化指定クラブ所属の女子選手約 140 名を対象とした調査（食事調査、身体計測、月経調査、睡眠調査）を 3 回実施した。

第 1 回の結果は、集計解析の上、第 6 回日本スポーツ栄養学会（2 演題）、第 19 回新潟医療福祉学会（2 演題）および第 30 回日本臨床スポーツ医学会（3 演題）においてそれぞれ報告した\*）。第 2 回調査（対象 136 名、夏季：2019 年 7 月～8 月実施）と第 3 回調査（対象：135 名、冬季：2020 年 1 月実施）のデータは、集計および解析を行った上で各選手に調査結果をフィードバックした。

現時点で明らかとなったこととして 3 点挙げられる。1 点目に摂取エネルギーおよび各種栄養素が不足している選手が多いこと、2 点目として居住形態（家族と同居、一人暮らし、寮生活）により栄養素等の摂取状況が異なること、3 点目に無月経あるいは月経周期異常の選手が一定数おり栄養・食事指導に加えて医療機関の紹介を要すことである。強化指定クラブに女性スタッフがいない場合もあり、これまで月経異常に関する困りごとを相談することが難しかったと訴える選手もいた。本調査を通して複数の選手を医療機関に繋げることができ、女性アスリートの健康維持のサポートが出来たと考える。

### \*）学会発表詳細

第 6 回日本スポーツ栄養学会、2019 年 8 月 24 日、東京大学駒場キャンパス

- ① 稲葉洋美ら、大学強化指定部活動女子選手における月経状況と食習慣調査に関する報告
- ② 星野芙美ら、大学強化部女子選手の居住形態における栄養素等摂取量に関する報告



第 19 回新潟医療福祉学会、2019 年 10 月 26 日、新潟医療福祉大学

- ① 稲葉洋美ら、大学強化部女子選手における月経状況と食事調査に関する報告
- ② 星野芙美ら、大学強化部女子選手の居住形態における食事状況に関する報告

第 30 回日本臨床スポーツ医学会、2019 年 11 月 16 日、パシフィコ横浜

- ① 稲葉洋美ら、栄養指導を受けたことがある運動部女子選手の栄養素等摂取状況
- ② 星野芙美ら、大学生女子運動選手の居住形態における栄養素等摂取量に関する報告
- ③ 丸山梨央ら、貧血を気にした食生活を送っている運動部所属女子大学生の食生活の実態

iii. 今後の課題

全 3 回の個別の集計およびフィードバックは完了したが、3 回分のデータをまとめた解析が未完である。本データを基に女性アスリートへの効果的な栄養指導方法を詳細に検討し栄養サポート体制を構築する。

(4) スポーツにおける脳振盪発生状況調査

i. 研究の概要

スポーツにおいて重篤な事故へ至るリスクの高い脳振盪について、その発生状況の把握とともに、適切な初期対応のための評価指標の確立や受傷後からの段階的競技復帰プロトコルの構築を目的とした研究を行っている。スポーツ現場における脳振盪の対応については、一定の競技規則を設けている競技団体も少ない状況であり、また大学スポーツにおいて統一フォーマットで一元管理している事例はほとんど見られない。

本学においては研究プロジェクトセンターであるアスリートサポート研究センターを中心に、有資格スタッフだけでなくアスレティックトレーナー資格を目指す学生が、強化指定クラブにて実習活動を行う環境が整っている。そのため、脳振盪の初期対応や復帰に向けた理論的背景を学生へ啓蒙することで、大学スポーツにおける安全管理に繋げることも目標としている。

ii. 実施状況

2019 年度においては、本学強化指定クラブのうち脳振盪発生が報告されている硬式野球部、男女バスケットボール部、男子サッカー部の選手約 200 名を対象に、Sports Concussion Assessment Tool (SCAT) を用いた測定を実施した。SCAT は脳振盪受傷時の初期評価として用いる質問紙形式の調査方法であり、今年度は主に受傷時の比較対象となる安静時測定を実施した。測定者は主に本学健康スポーツ学科にてアスレティックトレーナー資格を目指す強化指定クラブ所属の学生スタッフ（3~4 年生）が担当した。測定にあたっては、担当教員が事前に測定方法を指導したうえで、統一されたフォーマットを用いて実施した。

また、本研究に関連した内容は、2019 年 11 月に開催された第 30 回日本臨床スポーツ医学会学術集会にて発表した。

- ① 熊崎昌, 江玉睦明, 菊元孝則, 伊藤渉, 中村絵美, 平林怜, 稲葉洋美, 大森豪. 一年間のラグビー競技参加が SCAT に及ぼす影響. 第 30 回日本臨床スポーツ医学会学術集会(神奈川県横浜市). 2019. 11. 16-17.

### iii. 今後の課題

2019 年度は、安静時測定を中心に実施した。今後は継続的な傷害調査と連携したうえで、実際の脳振盪受傷直後の測定を実施していく必要がある。受傷直後の測定については、多くの場面で学生スタッフによる対応が想定されるため、継続的な啓蒙活動とともに、学生スタッフの継続的な配置が必要である。

### 3.2 アルビレックスグループと連携した課題解決型教育プログラムの構築

本学はプロクラブであるアルビレックスグループと連携し、インターンシップの実施やスポーツマネジメントの調査研究、経営者による講義、トレーニングマッチの実施、女子サッカー部員のアルビレックスレディースへの登録等の人材育成を行っている。

また、2018年度の事業ではプロスポーツ選手や学生アスリートがSNSをどのように活用すべきかを学ぶ場として公開セミナー「アスリートとSNS」を開催した。

これまでの課題として、実際の課題解決まで結びつけた教育プログラムを構築出来ていない点がある。本事業では課題解決まで結びつけるスポーツ教育プログラムの調査及び本学におけるプログラムの検討を行った。

#### (1) 先行事例の調査

スポーツに関する課題解決型プログラムとして、以下の2事例について調査を行った。

##### i. 埼玉 Sports Start-up

###### ① 概要

埼玉県内のプロスポーツクラブ・球団が抱える課題の解決につながる有望なビジネスプランを持つスタートアップ・創業希望者を公募・選抜し、ワークショップ、メンタリング支援を提供しながら創業・成長を支援するプログラム。協力している埼玉県のプロスポーツクラブ・球団が抱える課題や地域の課題がテーマとして事前に提示され、そのテーマに沿ったビジネスアイデアを募集している。

###### 【スケジュール】

2019年7月22日 参加募集イベントの開催

2019年8月31日 応募締め切り、書類による1次選考

2019年9月5日～8日 テストマーケティングブースの出展

2019年9月26日～ ワークショップ（計4日間）、2次選考

2020年1月17日 支援対象者最終選考会

###### ② 主催団体など

主催：埼玉県

共催：さいたま市、公益財団法人埼玉県産業振興公社、公益財団法人さいたま市産業創造財団、埼玉県商工会連合会、一般社団法人埼玉県商工会議所連合会、一般社団法人埼玉ニュービジネス協議会、特定非営利活動法人さいたま起業家協議会

協力：浦和レッドダイヤモンズ、大宮アルディージャ、埼玉西武ライオンズ

運営受託：デロイト トーマツ ファイナンシャルアドバイザー合同会社

###### ③ 視察報告

1次選考を通過した参加者で実施するワークショップの1日目に関して視察を行った。

- 【日時・場所】** 2019年9月26日（木） 埼玉会館
- 【視察者】** 新潟総合学園 スポーツ推進室 高橋孝輔（新潟医療福祉大学 スポーツアドミニストレーター）
- 【内容】** 1日目のワークショップでは以下のように参加者同士のチームビルディングを中心に行なわれていた。
- 1) 参加者全員（40名程度）の名前を全員が覚える。
  - 2) 模造紙に各自のプロフィールなど、自己紹介を作成し、壁に張り出す。他の人の模造紙を見て自由に付箋にコメントを書いて張って回る。
  - 3) チームビルディングのグループワーク。
  - 4) チームビルディングに関する講義と質疑応答。
  - 5) 懇親会。
- 翌日に各参加者が考えている事業を元にチームを構成し、アイデアをブラッシュアップしていくとのこと。各チームで検討したものを第三回以降にメンターとさらにブラッシュアップを重ねていく予定。



ワークショップの様子

- 【所感】**
- 1) 本ワークショップでは、新規ビジネスアイデアを構築する場合に、チームビルディングに時間をかけて行うことを重視していると感じた。ワークショップの講師の方や、運営事務局の方からの発言も実際にチームビルディングの重要性を話されていた。
  - 2) 実際に事業をアウトプットまで持つていくためには、事業化に対するサポート体制（伴走者）が重要だと感じた。実際の事業まで発展させるには、大学単独では難しく、行政やコンサルティングが関わる必要性を感じた。その場合、予算規模も大きくなり、資金調達面も併せて考えていく必要がある。

ii. 千葉商科大学サービス創造学部『プロジェクト実践』

① 概要

千葉商科大学サービス創造学部では、プロスポーツクラブである、千葉ロッテマリーンズ、千葉ジェッツふなばし、ジェフユナイテッド市原・千葉、オービックシーガルズと連携して学生がスタジアムイベントやメーカーとのコラボをプロデュースする授業「プロジェクト実践」を行っている。

2019年度に実施したイベント等

9月19日	千葉ロッテマリーンズホームゲーム「千葉商科大学スペシャルマッチデー」
11月10日	ジェフユナイテッド市原・千葉ホームゲーム「ジェフ観戦バスツアー」
12月21日 ・22日	千葉ジェッツふなばしホームゲーム 「千葉商科大学マッチデー 願いを届ける！籠球聖誕祭」
その他	オービックシーガルズホームゲーム運営、企業とコラボした商品開発 等

② ヒアリング調査

科目を担当する千葉商科大学サービス創造学部 専任講師 中村聡宏氏にヒアリングを行った。

**【日時】** 2019年10月24日

**【対象】** 千葉商科大学サービス創造学部 専任講師 中村聡宏 氏

**【調査者】** 新潟総合学園 スポーツ推進室 高橋孝輔（新潟医療福祉大学 スポーツアドミニストレーター）

新潟医療福祉大学 健康科学部健康スポーツ学科 助教 山本悦史

- 【内容】**
- 1) 「プロジェクト実践」という科目において2種類のプロジェクトを開講している。どちらも前期15コマ、後期15コマ 年間30コマ 4単位の科目となる。(2020年度からは授業時間の変更により年間26コマとなる。)
    - (ア) スポーツビジネス BB・プロジェクト (Baseball & Basketball)
 

「千葉ロッテマリーンズ」及び「千葉ジェッツふなばし」との連携プロジェクト。

千葉商科大学デーのイベント企画及び実施がメインとなり、球団や学部公式サポート企業等と共に企画提案を行うこともある。
    - (イ) スポーツビジネス・FB プロジェクト (Soccer & American Football)
 

「ジェフユナイテッド市原・千葉」及び「オービックシーガルズ」との連携プロジェクト。

大学生向けバスツアーの企画、試合運営スタッフをメインとして行い、球団や学部公式サポート企業等と共に企画提案を行うこともある。
  - 2) 履修者の主は2年生と3年生。学生が2年連続で同じプロジェクトを経験できるようになっている。1年目は1構成員として、2年目は後輩の指導とプロジェクトの運営を担う幹部としての立場を経験できるようにし

ている。

- 3) 開講前に2年生、3年生が会議する「スプリングキャンプ」を開催。学生がプロジェクトに取り掛かる際に前年度履修学生を中心に組織整備が行われる。「経営企画」「マーケティング」「広報」「営業」「経理」「人事」など、学生が組織を組み立てる。「人事」では成績評価の素案を作成し、教員に提出する。組織整備の際には学生に「どんな機能が必要か？」を考えてもらうように促す。
- 4) 講義にはBBプロジェクトには千葉ジェッツの職員が、FBプロジェクトにはオービックシーガルズの職員が講師として毎回プロジェクトのサポートを行っている。役割としては、企画を立てる際に権利関係に関する注意事項などコンテンツホルダー側の論理の指導や、企業からの協賛営業活動やその他各部署に対する企画提案の進め方等をアドバイスしている。
- 5) コラボ企業の探し方は、学生と面白がって何かをやろうとしている企業を探すようにしている。また、大学に公式サポート企業という制度があるので、その組み合わせを学生が自主的に企画することもある。

**【所感】**

- 1) 学生がプロジェクトを実施するために履修者で学生組織を構築し、役割分担を行うことによりイベントの企画・立案・実施をする授業方法ほどの大学でも検討できると感じた。
- 2) 経営系の学部のため、基本的な会計やマーケティング等の科目がカリキュラムに厚く配置されていることにより、本プロジェクトの推進が出来る面もあるのではないかと感じた。経営系以外の学部の場合、別の観点からの連携プロジェクトとして推進することが求められると感じた。

③ 視察報告

プロジェクト実践の成果となる、千葉ジェッツふなばしホームゲーム「千葉商科大学マッチデー 願いを届ける！籠球聖誕祭」の視察を行った。

**【日時】** 2019年12月22日

**【場所】** 船橋アリーナ

**【調査者】** 新潟総合学園 スポーツ推進室 高橋孝輔(新潟医療福祉大学 スポーツアドミニストレーター)

新潟医療福祉大学 健康科学部健康スポーツ学科 助教 山本悦史

新潟医療福祉大学 スポーツ振興室 稲田 茂高

株式会社アイ・シー・オー スポーツ推進グループ 藤田 耕一

【内容】

1) 学生がプロデュースしている内容は下記の通り。

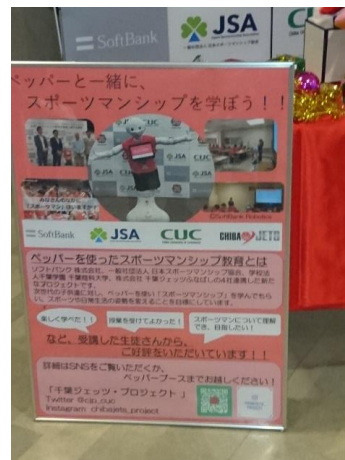
試合前	(1) CMによる告知
試合当日	(1) 表示物作成 (チラシ、ポスター) (2) ブース i. スタンプラリー ii. スポーツマンシップ協会×Softbank iii. サマンサベガとのコラボPR (バッグ等) iv. 子ども向けパズルエリア (3) アリーナイベント i. STAR JETS & glitter's と一緒に応援練習 ii. 大学の紹介と「プロジェクト実践」の紹介 iii. STAR JETS & glitter's のパフォーマンス iv. 会場プレゼントイベント

2) 学生は当日までの体制と、当日の体制を分けて企画している。

例) 当日まで・・・広報部、企画部、経理部、人事部 等

当日・・・ブース運営、アリーナイベント 等

3) 来場者に今回設置したブースを全て回ってもらうために、スタンプラリーを実施し、全てスタンプを揃えた人には抽選で選手のサイン入りグッズが当たるようになっている。



会場の様子

【所感】 1) 単なる広告協賛ではなく、学生の教育と連携した協賛として大変参考になる事例であった。

(2) 検討委員会等の開催

検討委員会のメンバーとして、以下のメンバーで推進を行った。

- |   |              |               |     |    |     |
|---|--------------|---------------|-----|----|-----|
| ① | 新潟医療福祉大学     | 健康科学部健康スポーツ学科 | 学科長 | 西原 | 康行  |
| ② | 同            |               | 講師  | 武田 | 丈太郎 |
| ③ | 同            |               | 助教  | 山本 | 悦史  |
| ④ | 同            | スポーツ振興室       | 室長  | 西海 | 幸頼  |
| ⑤ | 同            |               |     | 稲田 | 茂高  |
| ⑥ | 学校法人新潟総合学園   | スポーツ推進室       | 室長  | 高橋 | 孝輔  |
| ⑦ | 株式会社アイ・シー・オー | スポーツ推進グループ    |     | 藤田 | 耕一  |

新潟医療福祉大学健康科学部健康スポーツ学科でマネジメント分野を専門とする教員、新潟医療福祉大学での大学スポーツ振興を推進する職員、アルビレックスグループのオフィシャルエージェントである株式会社アイ・シー・オーの担当で検討委員会を構成した。

先行事例調査と並行し、以下2回検討委員会を開催した。

➤ 10月29日

【概要】

埼玉 Sports Start-up 及び千葉商科大学サービス創造学部「プロジェクト実践」の事例をもとに、本学で実施可能なテーマについて協議を行った。

2事例のような、事業企画型の課題解決型プログラムを科目として設置することは、本学の組織体制や既存の教育分野では実施が難しいと考えられた。今後は研究連携をテーマに、アルビレックスグループと意見交換をしてプログラム構築を図ることを検討していく。

➤ 2月4日（臨時委員：新潟医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科健康科学専攻長 佐藤大輔）

【概要】

新潟医療福祉大学における研究分野でのアルビレックスグループとの連携ニーズについて、大学院医療福祉学研究科健康科学専攻の佐藤大輔専攻長とディスカッションを行った。研究推進に関わる人材確保、及び関連費用など、資金調達を外部資金の獲得と合わせて考えていく必要があることが課題として挙げられた。

また、研究のテーマとしてはアルビレックスグループのスクール生や試合観戦者・イベント参加者にメリットがあるような研究の枠組みが今後の検討事項として挙げられた。



### (3) 今後の課題

本事業では事業企画型の教育プログラムの検討を当初進めていたが、本学の組織体制や既存の教育分野では実施が難しいと考えられ、具体的なプログラム構築までは至らなかった。検討委員会での協議内容の通り、今後は研究分野において課題解決型の教育プログラムの構築を模索していく。また、推進に必要な資金調達も同時に検討していくことが必要となる。

引き続き新潟医療福祉大学の特色である、リハビリテーション科学とスポーツ科学を組み合わせ、教育・研究・地域貢献の分野でアルビレックスグループとのさらなる連携を模索していく。

### 3.3 新潟医療福祉大学版学生アスリートのキャリア形成支援プログラムの構築

学生アスリートにとって大学時代は競技力向上のキャリア面で重要な時期であると同時に、将来社会で活躍するうえで必要なスキルを身につけ、人間形成を図る重要な時期である。本事業では学生アスリートのキャリア形成支援に関する先行事例の調査及び本学の教育の理念の実現と結び付けた学生アスリートのキャリア形成支援プログラム構築を行った。

#### (1) 先行事例の調査

学生アスリートのキャリア形成支援の取組として、以下の3事例について調査を行った。

##### i. 日本体育大学の事例

体育・スポーツ系学部にも所属する学生の比率が高い大学の取組を調査するため、日本体育大学にヒアリング調査を行った。

**【日時】** 2019年12月6日

**【対象】**

- 1) 日本体育大学 スポーツマネジメント学部 准教授  
兼 スポーツアドミニストレーター 佐野 昌行 氏
- 2) 同 アスレティックデパートメント事務室 事務長  
三戸 和明 氏
- 3) 同 学生支援センター 学修・キャリア支援部門 兼  
アスレティックデパートメント事務室 三村 信 氏

**【調査者】**

- 1) 新潟総合学園 スポーツ推進室 高橋 孝輔(新潟医療福祉大学 スポーツアドミニストレーター)
- 2) 新潟医療福祉大学 健康科学部健康スポーツ学科 学科長 西原 康行

**【内容】**

- 1) キャリア支援として、以下のような取り組みを行っている。
  - (ア) 学生の悩み相談として学修支援・キャリア支援を統合して予約制の窓口を作っている。
  - (イ) キャリアに関するイベントを定期的で開催している。OB・OGを招いたイベントを主に3年生を対象(1,2年生も参加可能)として開催している。
  - (ウ) 運動部独自でキャリア教育を行っている部もある。
  - (エ) 2年生の前期にはキャリアガイダンスを行っている。
  - (オ) 運動部の指導者に学生のキャリア形成について意識を持って頂くようコーチングエクセレンスセンターで働きかけを行っている。
  - (カ) 「日体力育成カルテ」という、学生がどれだけ成長したかを自己評価する仕組みがある。
  - (キ) 「重点強化選手」を対象としてマンツーマンでサポートするキャリア・アドバイザーを配置した(現在は調整中)。
  - (ク) セカンドキャリア講習会を全6回、2年生の20~30人の学生を対象に行った。毎回同じ学生が6回出席するような実施方法とした。

- 2) 学習支援として、以下の取り組みを行っている。
- (ア) オンデマンド学習支援システムとして、授業収録し、配信したものを見ることができる。遠征や大会出場等で授業に出席できない場合に、教員がオンライン授業を見た前提で課題を出すことが可能となる。
  - (イ) 大会等で長期間授業に出席することが難しい学生に対して公認欠席制度を定めている。
  - (ウ) 学生支援センターが長期欠席となる学生の情報を集約しており、事前に教員にその情報を共有することを行っているため、教員も課題対応を行いやすい。
  - (エ) 運動部の部長からも学生の履修指導を行うことに協力をしてもらっている。
- 3) その他関連する事項として、以下の取り組みを行っている。
- (ア) 担任制を敷いており、1クラス約20人で1人の担任が1~2クラスを受け持つ。クラス担任・学生支援センターが新入生オリエンテーションを行っている。日体大の歴史を学び、伝統であるエッサッサの練習を通じて学生間の交流が生まれている。
  - (イ) 在学生在大学の行事に関わる機会が多く設定されている。

- 【所感】** 1) キャリア支援や学習支援に関する取り組みにおいて、日本体育大学では学部・事務局・運動部が密に連携をとることによりプログラムを効果的に運用していることが印象的であった。

#### ii. 龍谷大学の事例

体育・スポーツ系学部には所属する学生の比率が低い大学の取組を調査するため、龍谷大学にヒアリング調査を行った。

**【日時】** 2019年12月26日

- 【対象】**
- 1) 龍谷大学 キャリアセンター長 インターンシップ支援オフィス長  
経営学部 教授 松永 敬子 氏
  - 2) 同 キャリアセンター兼インターンシップ支援オフィス  
事務部長 石川 達也 氏
  - 3) 同 学生部 障がい学生支援室 次長 田中 隆之 氏
  - 4) 同 学生部 スポーツ・文化活動強化センター 齋藤 正治 氏

**【調査者】** 1) 新潟総合学園 スポーツ推進室 高橋 孝輔 (新潟医療福祉大学 スポーツアドミニストレーター)

2) 新潟医療福祉大学 健康科学部健康スポーツ学科 学科長 西原 康行

- 【内容】** 1) 学生の人的成長を促すために「ライフスキルプログラム」を実施している。毎月1回、重点サークル及び強化サークル所属学生を対象とした講義を行っている。内容としては以下の事項を取り扱っている。現在は1年生

への取組が主だが、今後他の学年も充実させていく検討をしている。

- ・スポーツに不可欠なコミュニケーション力
- ・スポーツマンシップとフェアプレー
- ・アスリートの目標設定とメディカルケア
- ・栄養と運動
- ・龍谷大学学生アスリートとしての心得
- ・龍谷大学の歴史
- ・リーダーシップとフォロワーシップ
- ・チームビルディング
- ・チーム作りと信頼関係
- ・キャリア形成について

- 2) 「正課があつて初めて課外が成り立つ」という課外活動基本方針のもと、公式試合出場等に係る学習到達度の設定をしている。年毎の単位取得状況に応じて、「指導・警告」、「公式試合出場等停止」の 카테고리を設定している。
- 3) キャリアに関するプログラムは卒業前の4年生やOB/OGを呼び実施すると良い。学生にとってロールモデルとなり、自分事として向き合う傾向にある。
- 4) 学生には「日本一を目指す」ことよりも「応援されるアスリートになる」ことを意識するように伝えている。
- 5) 深草キャンパスを拠点としている、法学部、経営学部、経済学部、政策学部  
に所属する学生に対して「スポーツサイエンスコース」を開講している。  
サークルの活動に関連するスポーツ科学の科目を充実させている。

**【所感】**

- 1) 「ライフスキルプログラム」は学生のキャリア形成支援に対して非常に有効な取り組みであると感じた。特に龍谷大学のように重点サークル、強化サークル所属の学生が複数の学部に渡り在籍しているような環境の場合に必要とされているのではないかと感じた。

iii. アメリカにおける事例

国外の大学における事例を調査するため、筑波大学アスレチックデパートメント企画「2020 NCAA コンベンション視察研修」に参加した。

**【日時】** 2020年1月20日～26日（飛行機移動含む）

**【調査者】** 1) 新潟総合学園 スポーツ推進室 高橋 孝輔（新潟医療福祉大学 スポーツアドミニストレーター）

2) 新潟医療福祉大学 健康科学部健康スポーツ学科 助教 山本 悦史

**【内容】**

**1月21日**

- 1) アメリカ大学スポーツ関係者からのレクチャー
  - (ア)NCAA の概要 (テンプル大学准教授 Jeremy Jordan 氏)
  - (イ)ロングビーチ州立大学の取組について (ロングビーチ州立大学 エクゼクティブシニア副アスレチックディレクター Rob Clark 氏)
  - (ウ)NCAA Division II のガバナンスについて (NCAA Division II 副会長 Terri Gronau 氏, マネージングディレクター Maritza Jones 氏)
  - (エ)NCAA Division I のガバナンスについて (NCAA ガバナンスマネージングディレクター Jen Fraser 氏)
  - (オ)NCAA の学業・メンバーシップのマネジメントについて (NCAA 学業・メンバーシップ マネージングディレクター Geoff Silver 氏)
- 2) カルフォルニア大学アーバイン校 (UCI) 訪問 (UCI シニア施設管理・オペレーション 副アスレチックディレクター Paul Hope 氏)

**1月22日**

- 3) アメリカ大学スポーツ関係者からのレクチャー
  - (ア)NCAA の財務について (NCAA 財務管理 マネージングディレクター David LaFiosca 氏)
  - (イ)Division I 所属カンファレンスのガバナンスについて (American Athletic Conference ガバナンス・コンプライアンス 副コミッショナー Ellen Ferris 氏)
  - (ウ)南カルフォルニア大学 (USC) の取組について (USC 副アスレチックディレクター Paul Perrier 氏)
  - (エ)Division II 所属カンファレンスのガバナンスについて (Central Atlantic College Conference (CACC) 理事 Dan Mara 氏)
- 4) Claremont-Mudd-Scripps 連合 (CMS) AD 訪問

**1月23日**

- 5) NCAA Convention 公開セッション
  - (ア)Division III: Collaborative approaches—When Mental Health Intersects with Student-Athlete Identities
  - (イ)Maximizing Athletics Department Assets: Branding, Event Marketing, Youth Initiative and corporate Partnership
  - (ウ)Play Well with Others: FARs and the Cross-Campus Connection
  - (エ)Division III: Crisis Management: Being Your Best During Your Campus' s Worst Days
  - (オ)Engaging Your Campus Community on Student Athlete Activism

- (カ) Innovative Programs for enhancing student-Athlete Mental Well-Being and Mental Health
- (キ) Athletics Fundraising: Working Smarter, Not Harder with Technology tools and Tips
- (ク) GOALS Study: Understanding the Student-Athlete Experience
- (ケ) Championship Hosting 101: How to Create a Winning Team?
- (コ) Division II: Mental Wellness-Building Trust Between Coaches and Student-Athletes
- (サ) Division III: Growing Our Next Generation of Leaders in Athletics Administration
- (シ) Social Media: The Future of Influence Leader
- (ス) Two Things Every University President and General Counsel Need to Know
- (セ) Supporting Student-Athlete Development with Budget-Friendly Programing
- (ソ) NCAA Plenary Session: State of College Sport

#### 1月24日

- 6) 参加者振り返りセッション
  - 7) カルフォルニア大学ロサンゼルス校訪問
- 【内容】**
- 1) NCAA はボトムアップのガバナンスを構築しており、規則は大学やカンファレンスが定めている。NCAA は定められた規則に従い運営を行っている。
  - 2) NCAA から Division I への配分金の中には学生アスリートの学業支援等にしか使用することが許されていない予算もある。また、大学の学生アスリートの学業成績によって配分される予算も今年から導入された。
  - 3) アメリカの大学の場合、基本的な考え方としてアスリートである前に学生であることが重要である。学生アスリートであっても質の高い高等教育を受けられるということが最も重要なポイントになっており、学生アスリートがきちんと卒業できる、卒業した後にはしっかりとした暮らしを過ごしていけるように準備させてあげることが1番の目的である。
  - 4) NCAA の理念に則って運営していくためには大学の学長がアスレチックデパートメント (AD) をコントロールできる状態でなければならない。学長によっては AD に興味が無さすぎたり、逆に興味がありすぎたりする場合もあり、NCAA としては初めて学長になった方向けに AD がどのように大学の一部として存在するべきかを教育するためのプログラムを提供している。AD が大学に大きく影響力のあるものだと認識してもらうことが1番重要である。
  - 5) 高校生の時点でプロになれるのはほんの一握りだと認識しており、高校生が NCAA でプレーする大学を選ぶ際に、引退後のキャリアプランと合わせて

進学先を選択している。

- 6) 学業サポート体制や医療サポート体制の整備が競技面で優秀な選手を獲得するための方策となっている。
  - 7) USC では以下のような学生アスリートのキャリア支援に関わる取組を行っている。
    - (ア) 学業サポートには 20 人のフルタイム職員が在籍しており、すべてのチームに 1 人のアカデミックアドバイザーが配属されている。もし成績が危険な位置まで下がっている学生アスリートがいた場合は、専属のチューターがつくシステムとなっている。
    - (イ) コミュニティサービスについても専属のスタッフがいて、学生アスリートがコミュニティと関わっていけるようにプログラムを組んでいる。学生アスリートがキャリアを形成し生活を送れるようにライフスキルやキャリアサポートを行っている。
    - (ウ) 近年特に重要視されているのは精神面でのサポートであり、45%ほどの学生アスリートがこのプログラムを利用している。競技におけるメンタルサポートというよりは一般的な心のケアが主な目的となっている。
    - (エ) 学生アスリートとそれ以外での成績の差が大きく広がってきており、その差を解消することが AD の学業サポートにおける課題である。AD はあくまで大学の傘にある組織なので、大学のミッションに基づいて、AD で受け入れたからには学生アスリートの学業での成功も保証しなければならないと意識している。
  - 8) CACC では以下のような学生アスリートのキャリア支援に関わる取組を行っている。
    - (ア) カンファレンスとして学生アスリートにはキャリア教育やリーダーシップトレーニングなどを行っている。
    - (イ) 学生アスリートの活動について一般に発信していくことも行っている。ボランティア活動等社会に影響のある活動を行った選手について情報を公開している。
  - 9) Faculty Athletic Representative (FAR) は AD と大学をつなぐ教員の代表者であり、学生アスリートに関わる問題について AD と学内の関係性を構築し、学生アスリートを支援することが役割である。学生アスリートへの支援においては、AD と FAR が連携・情報共有し、学長、教員、一般学生と活発なコミュニケーションを図っていくことが重要である。
  - 10) 学生アスリートはプロフェッショナリズム、コミュニケーション、リーダーシップ、コラボレーションの 4 つの点で優れているため、その経験を如何に専門的なキャリアに結び付けていくか、という観点が重要である。
- 【所感】**
- 1) アメリカでは大学経営におけるスポーツの捉え方が日本の大学と大きく違うと感じた。より素晴らしい大学を作るためにどのようにスポーツを構築

していくべきか、各大学が明確に意思を持っており、各大学に利益がある形でカンファレンス、NCAAのルールを定め運営されていることが驚きであった。

- 2) 大学入学時の高校生のキャリア意識も日本と異なると感じた。プロにはなれないという前提で引退後のキャリアも踏まえ進学先を選定しているという意識のスタート地点の違いを、日本での取組を考える上では考慮する必要があると感じた。

## (2) 検討委員会の開催

検討委員会のメンバーとして、以下のメンバーで推進を行った。

- |              |                    |     |        |
|--------------|--------------------|-----|--------|
| ① 新潟医療福祉大学   | 健康科学部健康スポーツ学科      | 学科長 | 西原 康行  |
| ② 同          |                    | 講師  | 武田 丈太郎 |
| ③ 同          |                    | 助教  | 山本 悦史  |
| ④ 同          | スポーツ振興室            | 室長  | 西海 幸頼  |
| ⑤ 同          |                    |     | 稲田 茂高  |
| ⑥ 同          | 学務部 キャリア開発室        | 室長  | 石崎 伸一  |
| ⑦ 同          | 図書館・学習支援課 学習支援センター |     | 船山 澄子  |
| ⑧ 学校法人新潟総合学園 | スポーツ推進室            | 室長  | 高橋 孝輔  |

新潟医療福祉大学健康科学部健康スポーツ学科でマネジメント分野を専門とする教員、新潟医療福祉大学での大学スポーツ振興を推進する職員、学生の就職等キャリア支援を行う職員、学習支援を行う職員で検討委員会を構成した。

先行事例調査と並行し、以下5回検討委員会を開催した。

### ➤ 10月3日

#### 【概要】

委員に対し、本事業の概要説明を行い、各委員からの課題共有を行った。①キャリア意識醸成、②キャリアデザインの機会確保、③学業との両立のための学習基礎力の支援、④目標設定スキルの向上、⑤コンプライアンス教育、⑥「スポーツを学ぶ」から「スポーツで学ぶ」へ、が本学のキャリア形成支援プログラムに盛り込むべき事項の軸の候補として議論された。また、プログラムの在り方として、教育課程における科目として設置することを検討していくこととなった。

### ➤ 11月14日

#### 【概要】

学生アスリートのキャリア支援に関して、教育課程における科目として設置している他大学の事例を検証し、本学におけるプログラムの在り方を議論した。4年間の過ごし方やキャリア意識の醸成を1年次と2年次に充実させた取組が重要であるため、その部分を意識し



た学年別のプログラム構成を検討していくこととなった。また、学業情報に関して学科、事務局、部で共有する体制の構築の検討をすることとなった。

➤ 12月19日

【概要】

日本体育大学の事例の調査報告を行い、委員で共有を行った。また、学業情報に関する情報共有体制の議論と、キャリア支援プログラムに関して各年次において必要な支援内容について議論を行った。

➤ 1月30日

【概要】

龍谷大学の事例、及びアメリカにおける事例の調査報告を行い、委員で共有を行った。また、キャリア支援プログラム実施における運営上の課題について議論を行った。実施方法についても教育課程の新規科目で行う内容、別個のセミナーで行う内容、既存授業科目の中で行なう内容、など特性に応じて適正に振り分けていく検討をすることとなった。

➤ 3月5日

【概要】

これまでの議論から、①キャリア意識醸成、②キャリアデザインの機会確保、③学業との両立のための学習基礎力の支援、④目標設定スキルの向上、⑤コンプライアンス教育、⑥リーダーシップ・チームビルディング、⑦就職活動対策を軸としたプログラム素案を策定し、課題について議論した。インターンシップ、地域貢献、コーチとのコミュニケーションについてプログラムに追加を検討していくことになった。また、養成する人材像及び目的を明確化した。

(3) 構築されたプログラム素案

実施方法（科目での設置、セミナー実施等）については未確定であるが、以下の養成する人材像を軸に教育プログラムを学生アスリートに提供するべく体制を検討していく。

【養成する人材像及び目的】

本プログラムは、学生が大学でのスポーツ活動を自分の人生にどう位置づけるかを考える機会を提供することにより、新潟医療福祉大学スポーツ憲章を体現して、スポーツで培った力を社会に還元する幅広い視野を持ったQOLサポーターを養成する。また、教育課程との連携により、文武両道を体現する真の学生アスリートを養成し、日本のスポーツアスリート育成の仕組みを変革する砦となる。

## 【プログラム】

### ① 1年次

- 4年間の過ごし方と本学でスポーツを学ぶ意義
- デュアルキャリア
- 目標設定
- パフォーマンス向上について
- 学修基礎力向上について
- スポーツコンプライアンス
- 地域貢献について
- 指導者とのコミュニケーション

### ② 2年次

- 1年次の振り返りと目標再設定
- キャリアデザイン
- 目標達成と学習
- スポーツコンプライアンス
- トップ選手によるセミナー
- OB/OGによるセミナー
- リーダーシップ
- チームビルディング
- インターンシップについて

### ③ 3年次

- 2次の振り返りと目標再設定
- キャリアデザイン
- スポーツコンプライアンス
- 就職活動対策

### ④ 4年次

- 個別相談体制での対応

## (4) 今後の課題

プログラムについて2021年度に試験プログラムの実施、2022年度にプログラムの本格実施を目指し構築を図る。また、学生のキャリア・学業に関する情報を関係各所で共有しながら学生のキャリア支援を行っていく体制を整備していく。

## 4 まとめ

### 4.1 実施した事業

本事業では、大学スポーツにおける先進的モデルとして以下の3項目について企画・立案及び実施を行った。

#### (1) アスリートの傷害発生予防を目的として調査研究と予防的介入活動

アスリートサポート研究センターの取組をさらに推進するため、4つの研究活動と予防的介入活動を行った。

- i. 同一フォーマットによるスポーツ傷害発生調査
- ii. 超音波による骨折スクリーニング調査
- iii. 大学女性アスリートの栄養サポート体制の構築
- iv. スポーツにおける脳振盪発生状況調査

各調査において、それぞれ傷害発生予防に繋がる知見を得、既に課題を抱えていると判明した選手に対しては個別に対応を行った。各成果に関してそれぞれ学会や研究会等で報告を行っている。また、今後の選手サポート体制の構築に必要なデータを得ることができた。

#### (2) アルビレックスグループと連携した課題解決型教育プログラムの構築

スポーツに関する課題解決型プログラムの先行事例の調査及び本学における実施を検討する検討委員会を組織し、プログラムの検討を行った。

先行事例として「埼玉 Sports Start-up」と「千葉商科大学サービス創造学部『プロジェクト実践』」の調査を行った。

また、検討委員会を組織し、本学における実施について検討を行った。本事業では事業企画型の教育プログラムの検討を当初進めていたが、本学の組織体制や既存の教育分野では実施が難しいと考えられ、具体的なプログラム構築までは至らなかった。検討委員会での協議内容の通り、今後は研究分野において課題解決型の教育プログラムの構築を模索していく。また、推進に必要な資金調達も同時に検討していくことが必要となる。

#### (3) 新潟医療福祉大学版学生アスリートのキャリア形成支援プログラムの構築

本事業では学生アスリートのキャリア形成支援に関する先行事例の調査及び本学における実施を検討するための検討委員会を組織し、プログラムの検討を行った。

先行事例として、「日本体育大学の事例」、「龍谷大学の事例」、「アメリカにおける事例」の調査を行った。

また、検討委員会を組織し、本学における実施について検討を行った。プログラムで養成する人材像及び目的を定め、各年次で行うべき内容を定めた。2021年度に試験プログラムの実施、2022年度にプログラムの本格実施を目指し構築を図る。また、学生のキャリア・学業に関する情報を関係各所で共有しながら学生のキャリア支援を行っていく体制を整備していく。

## 4.2 総括

前述のように、本学は保健・医療・福祉・スポーツの総合大学として、対象者の QOL (Quality of Life) 向上を考え、QOL 向上のため支援を実践する人材 (QOL サポーター) の育成を教育の基本理念としている。また、本学は地域のスポーツ振興や人材育成に寄与するためのスポーツ資源として、教員の研究成果、運動部、スポーツ施設、健康・スポーツを実践的に学ぶ学生等の資源を保有している。

本事業を通して、本学の特色であるスポーツ科学とリハビリテーション科学の融合、アルビレックスグループとの連携についてさらに推進ができたと共に、本学ならではの学生アスリートのキャリア形成支援プログラムの構築の推進ができた。

本学は今後も独自の特色を発揮しながら大学スポーツ全体の振興と発展に貢献できるよう、取り組みを継続していく。